太子傳記　五

ガラス使用

書
24.12.22
国会図

十五年丁卯夏五月太子そうし給ひて
臣（やつこ）が先身（せんしん）漢土（かんど）に修行（しゆぎやう）してもちたりし所の
経いまし衡山（かうざん）にありのぞむらくはつかひを遣
しておそてとりよせ給はんやうの所のなかに
そらくべうんの思んと天皇大にあやしみ
給ふともかくもはからひすましけと誰使に
つかはさんやとあまねく百官の人と撰
してそうし給ひて大礼（だいれい）小野臣（をのゝおみ）妹子（いもこ）
撰ひかゝりて秋七月妹子等（いもこら）を大隋（ずい）へ
遣す

ガラス使用

或説云鞍作福利といふ通事をもて太子妹子にみことのりしてつかはしつゝ大隋の赤縣のうち江南道の中に衡州治梨州中より衡山あり是南嶽なり

七代記云南嶽衡山と衡州に属す其衡山は五嶽之一故に其山に五峯あり一には般若峯二には栖梧峯三には恵日峯四には祝融峯五には紫蓋峯等之一とれ峯におゐて禅房静室あり思禅師六としは此山に生して佛道を一生におく一塔并一磐石といふ其三石くらんにてないの佛殿の前にあり三塔はくらんにてなゐのみなみふあり尖なる山の中に霊仙あり異菓消梨干菓と名つけ南河聖果と浄る者ありこゝに梨すゝめ生ぜて思禅師まれわさまふ梨と果とて味美めして世間にたぐひなし大さ鉢くらゐのごとしまりこのくさこみ生ぜて思禅師常なんともろ河にのぞんて般若経の小なん方の石室の中にありて法華経鉢

ガラス使用

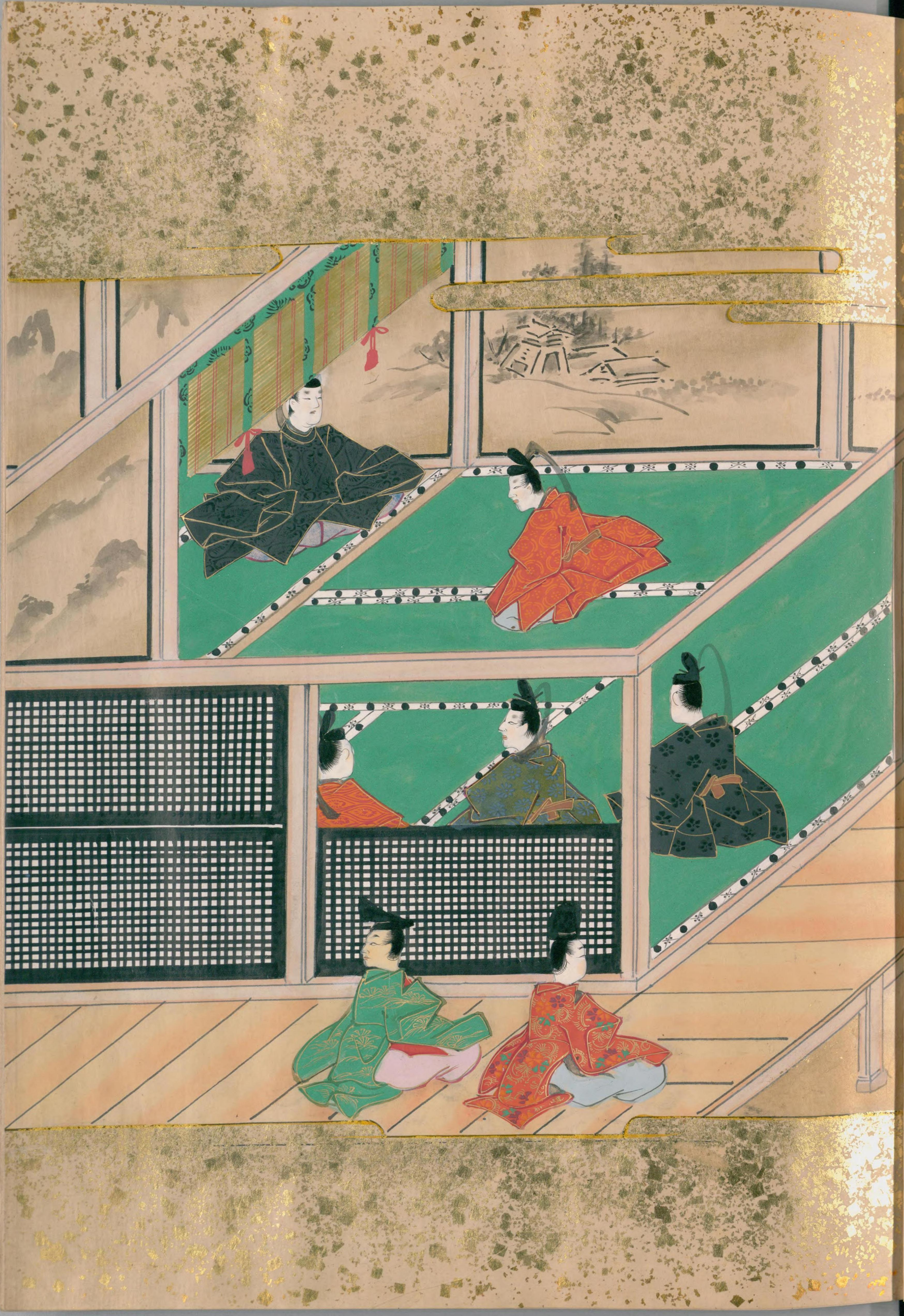
錫杖と挙とまり弟子にこそありしと云
昔我後のくち云佛法乃処ゆむしくく身
と変て衆生を教化せんと今にいたり
てすゝうら嶽寺に九ん斗素新ありて堂
にこもり上足の弟子二人同時に素新
ありき弟子並に足聖人ありそれ二乃
弟子一といふ智顗となつく天台山とい
荊州玉泉寺の安寺にあり来去住持を
一といふ智勇となづく南嶽の衡山に悠
遊を碑下に題して云僧列天皇くゝ

の聖に化せり示すり聖人わらはれしこゐ
より隋の代已下におよふまて禅師乃調
度とすり金録画像佛肉舎利玉典微言
香炉縄衣水瓶錫杖石鉢縄床松室桂
殿いかにとしてふりて朽す衡山の道場に在
ましくて安置を今代乃道俗瞻仰し
帰依を修し思禅師の遠忌傳めて南嶽の
衡山に嶽寺ありその寺に般若臺双
峯臺集益臺西日臺柏梧臺華嚴
臺四禅臺祝融臺南臺般若閣等三十

餘所ありけるのち衆僧ありて六時に行道
としころすみし思禅師居住の嶽
寺の門人は綿を脱て布衣をきて
思禅師衆徒の中にのぞんでのたまはく
久しく世間に住して衆生を度脱し
給へとゑんしやうす禅師便宜を出し
綿とぬぐ者ありゆへこそ世間に住を
にとゞせんといふ一万余の衆生ありみな艾
布とまとふ者なりすなはち是思禅師
の徒衆なり禅師遷化しをはりてこの

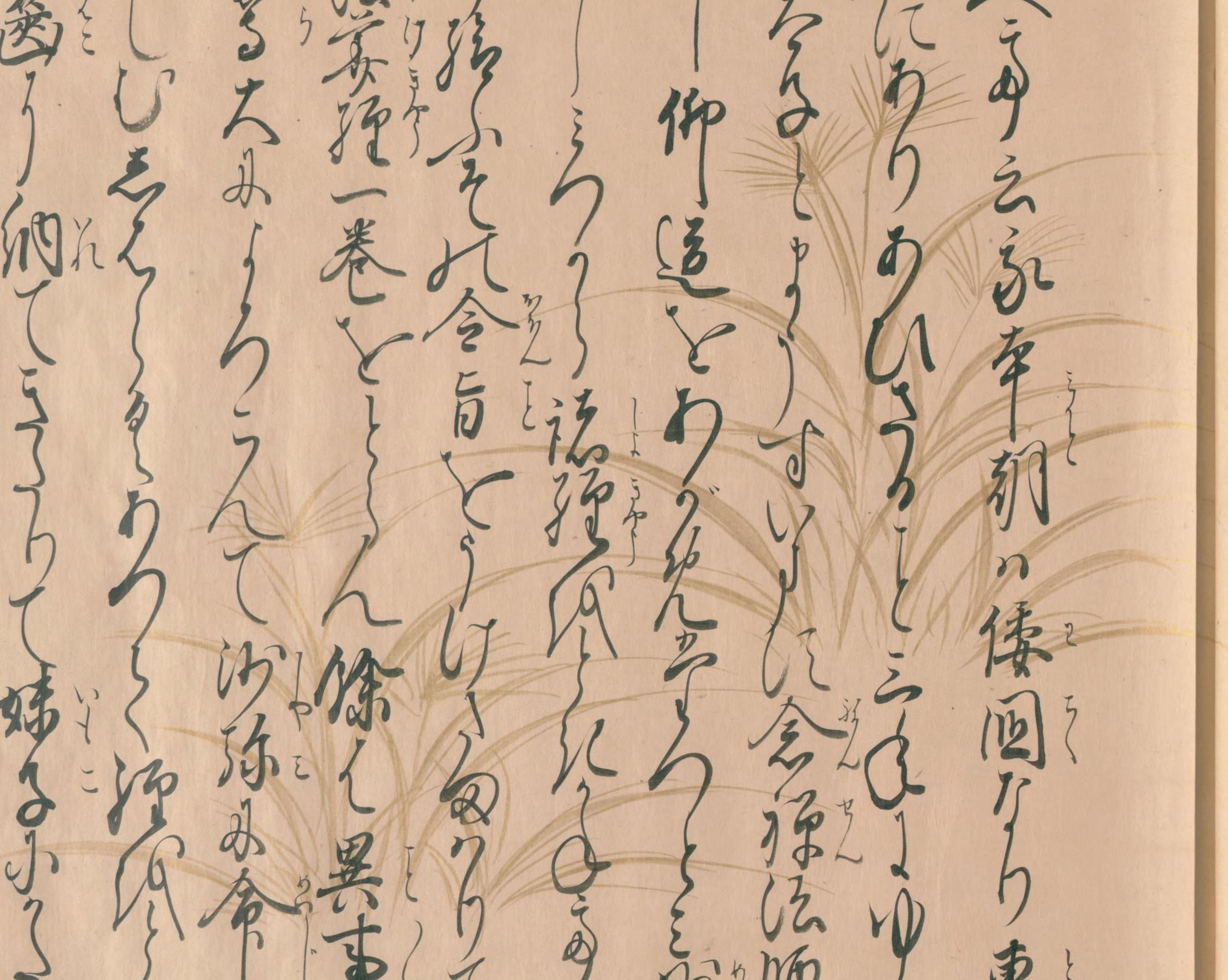
そのところの遺跡にとゞまりけり衡嶽
山の間に道場三十余所あり僧俗居る
し並衡州の郭下にとゞまりて道俗
山中に五千已上あり毎年雲のごとくに
あつまりて忌日の大乗法会をまうくる
こと連々として絶ず
山中に般若臺あり南溪の下よりのぼりて
げさ松の中に入を三四許里門谷の口に
のぞむ昔むかしの同法ともすでに遷化して
唯三軀のこれりうやまひしく此法服をまもる

ガラス使用

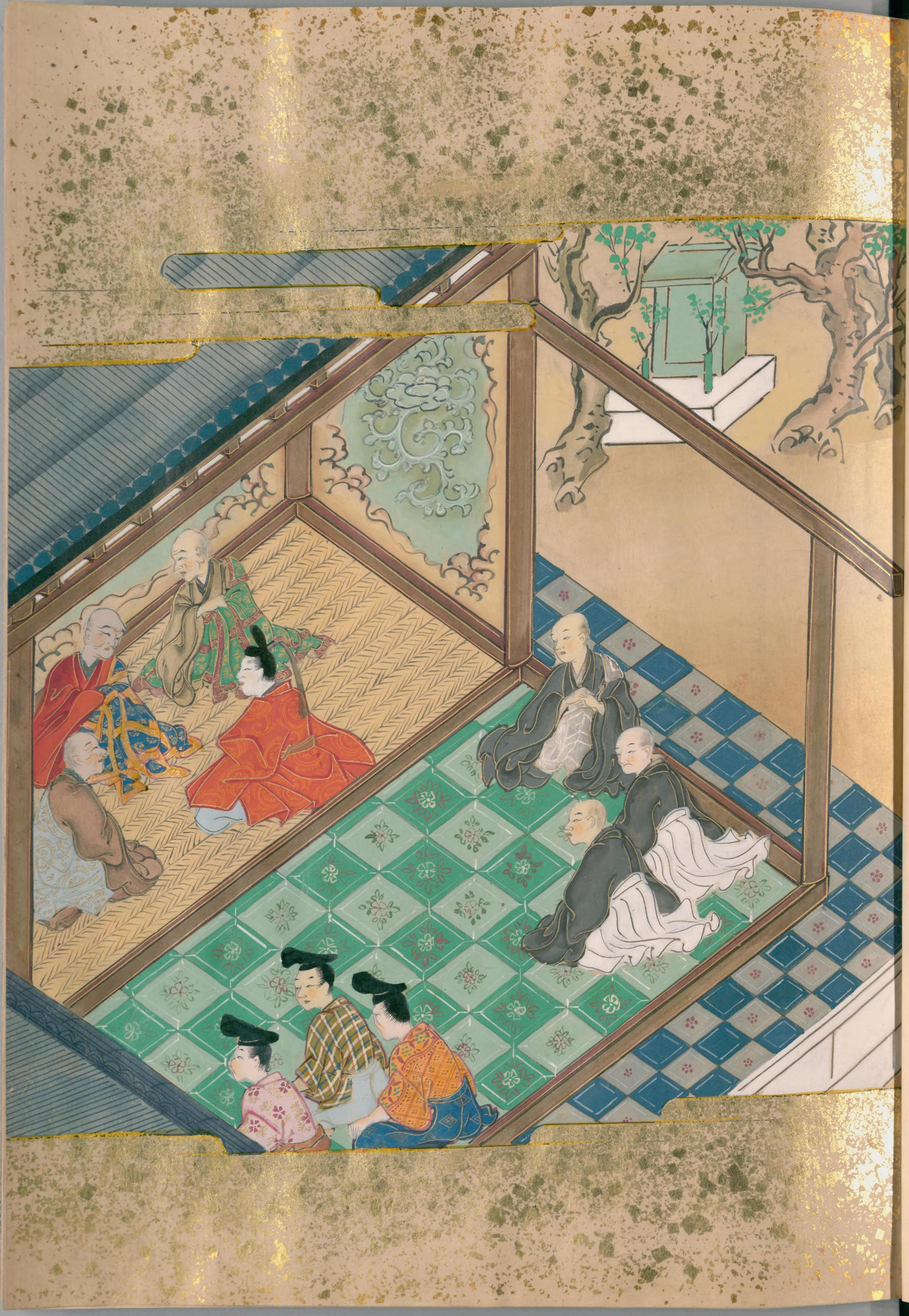


音名を称（わけ）てかくのへしとこ音しるし残（のこ）き座（ざい）
み位せし内持ホ几法華経種疏（そ）して一巻（くわん）とすゝび
うまそめし
りく
きゝつ
通（ず）し

妹子(いもこ)はしこにわたりてかの古人(くれうど)にあふてこれ
弁衡山(こうざん)にいたる太子のみことのりのごとく
南溪(みなみのたに)のたより入(いり)て門の側(そく)にいて隙路を一れ
沙弥(しやみ)ありて門のうちに立てりしよすて云
念禅(ねんぜん)法師の使(つかひ)人いま来(たらん)とて一の老僧(らうそう)まさ
まうつえをそれはくおゆるく二の老僧ありて
おひつゝきて出あひくゝりなんとて歓(よろこび)とふ心
妹子(いもこ)三拝す言語(ごんご)通(つう)ぜずして地に書て意(こゝろ)を
通(つう)じておのゝく法服(はふぶく)とおくり老僧地(つち)に書(しよ)し
て云念禅(ねんぜん)法師はしこにあらくは何とか号(なづけ)る妹子



こたへて云我本朝(こうて)は倭国(ここく)なり東海(とうかい)にあり
中にありあひさうこと云ほゆくいか
聖徳(しやうとく)太子とかうすいかにして念禅(ねんぜん)法師とは
者(ひと)す御道とわのかんぞろうとこ妙義(めうぎ)をかく
つうしうつり諸経(しよきやう)をえひとつ義疏(ぎしよ)と
たり持ふそれ合旨(がんし)をうけをうりて所持(しよぢのう)儀
せり法華経(ほけきやう)一巻をとゝん除(のぞ)く異事(いじ)すし
老僧(らうそう)大みよろこんて沙弥(しやみ)に命(めい)じてこれを
とりしきりわうらく師によりて一の
漆(うるし)の函(はこ)ゟ納(をさ)れてまゐりて妹子(いもこ)にわたりて云



この経(きやう)并函(はこ)は念禅(ねんぜん)法師の持給ふ所なり
念禅はにゆうしくしてのち読経(どくきやう)に惰倦(よのうん)し給
かりて師のやうに一点(てん)の処ある僧等(そうら)師とよぶ
身とちらく南峯(なんがく)の上の一の石塔(せきたう)とさして
云われは念禅(ねんぜん)遷化(せんげ)し給ひ骨(こつ)をおさめし
塔(たう)なり此内に三十六歳妹子(いもこ)受(うけ)辞(いとま)て帰し
てかの三の老僧(らうそう)とのくわつつんで一の
函(はこ)よりおさめ給(たまふ)して
これをとらる并
封書(ふうしよ)のくこ相探

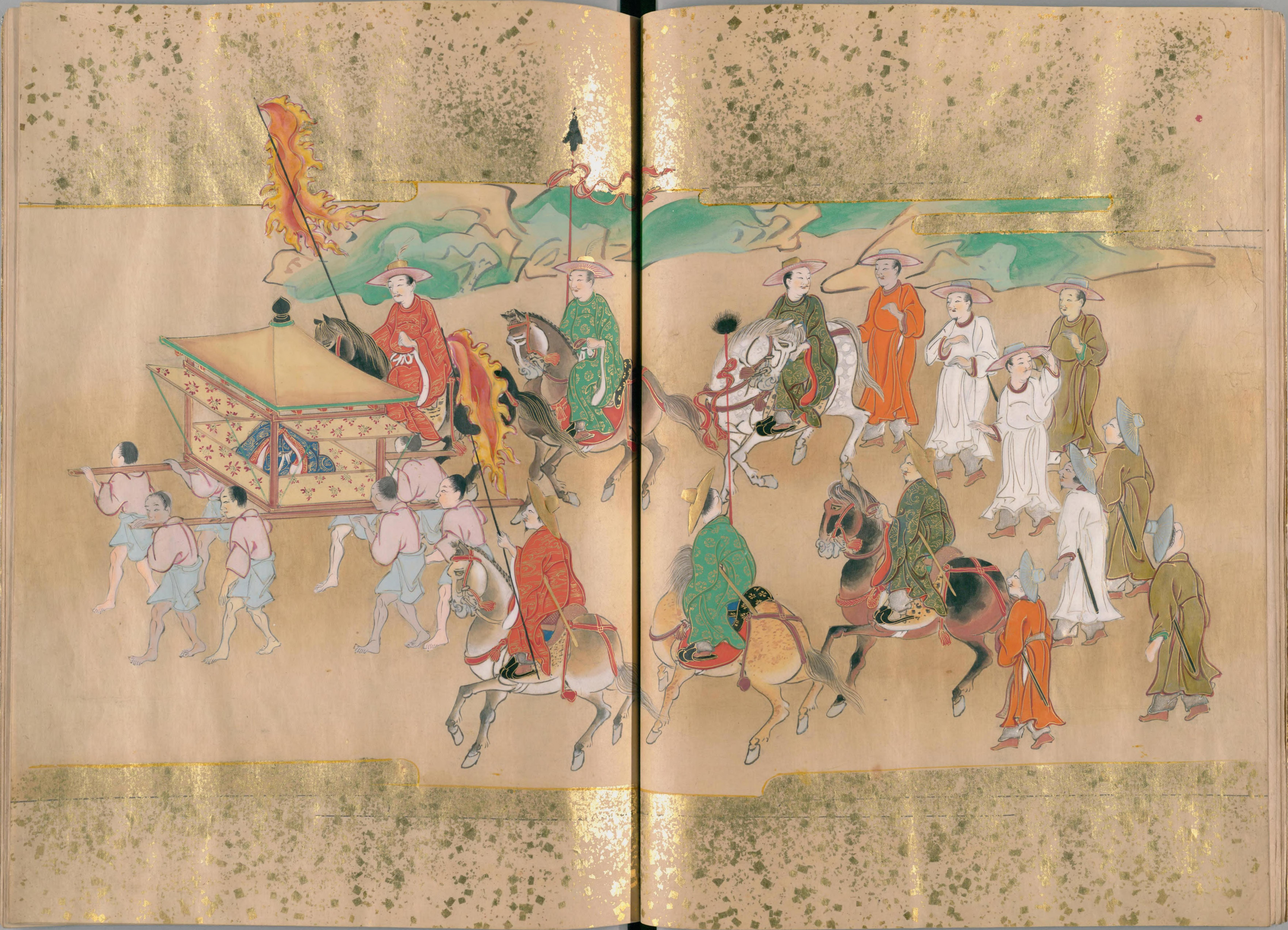
おくはしくりまいらせて太子にさづけ給
ふたゝびあまよろこびしてかの函をひらき
みれば仏の御舎利（しやり）三枚（まい）各青等あり書
せる辞へこれ仏のあるくと太子におくら
ましてありてそれよりしだいにいれたいふこゝをゆへ
とおしまて御記によりさゝめゆじしゝ秋九月
太子そうし申させ給ひて六郎生九命（めい）率水田に
よりの水田のりゝい池披（けつき）にわりりし元旱（ひでり）
わろくい六郎生天といゝし天りづして出る
わづかいは国みそてつんしたいのまひらくは

諸国（くにぐに）にあまねくのりして民とおらして
池とほらしめん天皇太子によろこびじやうしあ
たちあんとみちりしておこれりし此冬十月
やまとの国にたけちの池藤原（ふぢはら）の池（いけ）かた
の池すかはらの池三ところの池山田の池秋池（つきのいけ）と
またしし山しろの国に大溝（おほみぞ）を栗隈（くりくま）にほり
かうちの国の戸苅の池よさみの池大津
の池ほそくの池等（けう）とおほしし彼と諸国
に造（まき）して池とおほく地の大小にあてゝくゞり
わうこの国ともに屯倉（みやけ）とてろ功（いさを）おほく上にあり

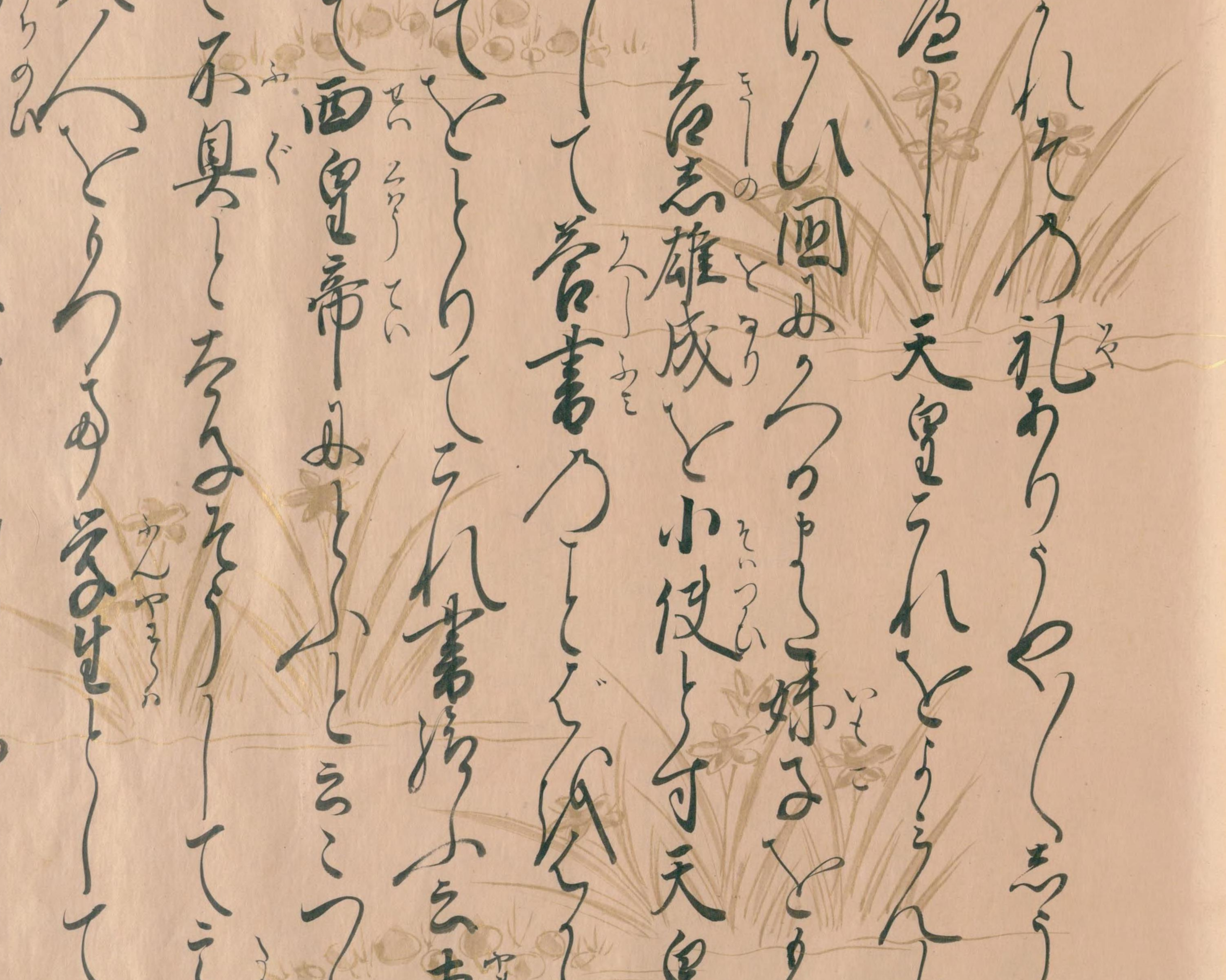
すへて天下元旱のうれへなく百姓とみさかへ
ふうきたり
十六年戊辰夏四月小野臣妹子大隋より
かへりまうてけり隋朝のつかひ裴世清并十二
人妹子にしたかひてまうてきたりける
かくて六月に難波の館につきて妹子奏して
いはく臣百済をわたりける日百済人大隋の
表をぬすめとりけりたてまつることをえす
群臣はかりていはく妹子はおほやけにあたりて蕃国の
表をうしなへりつゝしみて流刑におこなふへしとそうす

こゝにそのとき天皇太子にとひ給ふ太子奏して
のたまはく妹子のつみはまことに寛なれとも
好を隣国とむすふことは妹子の功なりいさをし
はるかに先方にして百済とえんくてつかはりぬるの
これによりて隋のつかひひとりきたれり妹子をとかむへからす
ことわりたゝしうのたまひけれはゆるされにけり
まうされん奏太子ゆるし給ひて妹子かつくと
ゆるし給ふ秋八月大隋のつかひ京にいらんとす
とのりして餝騎七十五疋をつかはして
椿市の街にむかへしむ

ガラス使用



太子ひつしてみつそれから世清(せいしく)くらうしに太子
の御つかへの林(くれ)の上とかんて左右にまゐりて云か
しらふ真人(まひと)の氣ありとその林(くれ)の下とわた
るとれるよりおりて揖てさりぬかんかりのこれと
あやしめり隋乃かんじの書ます皇帝(くわうてい)倭皇(やまとわう)
にうふ使人(つかい)長吏大禮蘇因高等てうりてと
いとつぶさにすと云て天皇太子にとしいふ
らく此書いかん太子そうしやにかりつく天子志
まいり王にあるゐの書の式なりとられそ皇帝(くわうてい)
の字は天下に一のことなりして倭皇(やまとわう)の字とも



ちねしられその礼ありとやしくおうりしてかさ
ね給ふ色しと天皇これとごらんじ給ふ九
月隋(ずい)の使ひは国にかへる妹子(いもこ)をたつ
ひとし吉志雄成(きしのをなり)を小使とす天皇太子に
下とおりて答書(かへしふみ)乃ことゞもいひ給ふ
太子ふでとりてこれ書給ふ云東天皇(やまとのすめらみこと)う
やまいて西皇帝(せいくわうてい)にまうすとこつゝしんでく
ゆうしきて不具(ふぐ)と太子そうしてこる向漢人(あやひと)
玄理(くろまろ)ホ八人ともに学生としてつかはす
これ月重日太子いかゞのうらやましくあ

殿の内に入給ふ（此殿をゆめでん のちにしかり）御床をとゝめとまり

ませて一月にこもりしゆらして入ありて何

らばかしめ海表の雜事とゝのへとゝのひ諸

經の疏をつくり給ふにしらざる所の義あれ

ばすなはち夢殿に入給ふつねに東の方より

金人いたりてつげ給ふに妙義をとりくす戸を

とぢて開き給はざりし七日七夜御膳とす

めす侍従とめされを妃已下らうづくしみん

給ひ河人大にこしとおもひけり恵慈法師

ましまう殿下三昧定に入給へりおへくなかれと

らくとまうされ八ケ日のあしたに玉机の上に一巻の

經ありもちいでたまひける恵慈法師をめして

告てのたまはく是昔先身衡山に住せし比

りその經は去年妹子かりてとらせしは吾弟子

の經也三の老比丘昔兄の所を知らずして他經

をとらせたりしこのたびに昔この經をせまし

ねとつかはしてとりてこぞりぬかへるの字を

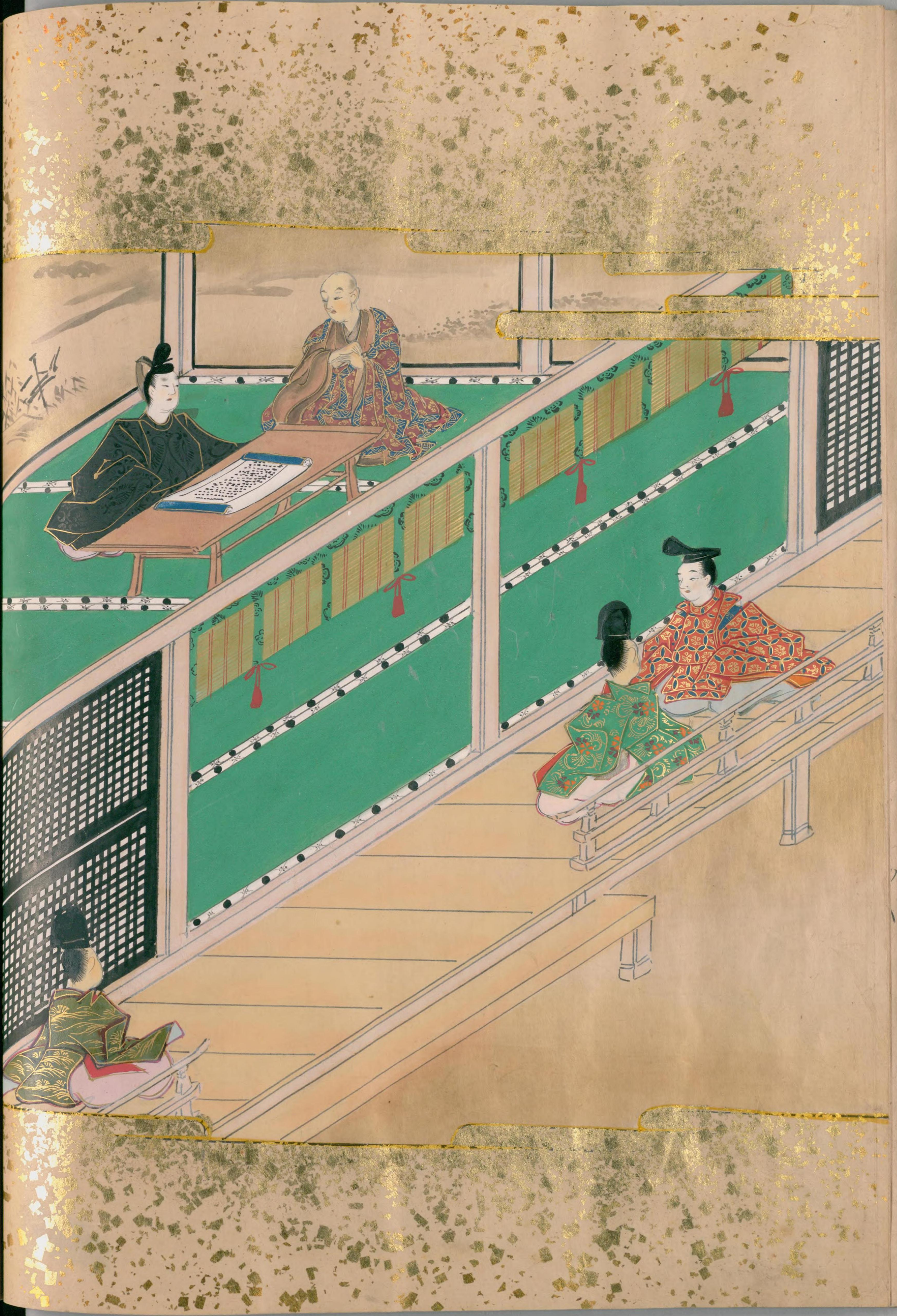
さして法師に給ふ師大にかしこまりて

これとおもひしかり妹子かりてとりし經に

ほとの字かなかりし

太子定と出給くのちつねにふかしぎみの事
ふとわりわくれしへしく大隋(ずいこく)国の僧(そう)めにく
ゑぜんちし経すりこのんで書(やと)としへりし
書とし母さんて弟子さつるみわしぞ見すゐ
いさしかとし返すり

美みより言経の像(ぞく)して一巻とし黄紙(きかみ)
黄標(きへうし)玉軸(ぎよくぢく)綺帯(きのひも)漆題(うるしだい)一行(ぎやう)に三十四字字凡(ど)
太子さいすり在をんさうりゅうしてのち山背(やましろ)
大兄のみこ六時(じ)に礼拝(らいはい)し給ふ丁亥のとし
十月廿三日の夜半(よはん)にくゐちちまちに失せさら



さる事と志ろしめされけりとしかのみよしすしみとこ大
ふわやしことりつくられへとも経には疏ぬ
くんだうに妹子かりてまうりし経なり
十七年己巳夏四月八日太子ちかしめて鎮西（せうせん）の聲（こゝやう）
の疏（よ）とされける舟に百済（そう）の僧道（ろうしだう）欣等（きんら）十八人
ひごの国になかされたり太子の風とのたまひて
ろふとゝまりしと欲給ふよりの元興寺（ぐわんこうじ）に
おくれ候しむ太子わりかの九ゝの中めし人給
これふとい給ふに人ゝこ志あくしんの本と
りつあし給ふに十僧辞謝（どしや）してなんぎとなる

ぐしひその小等僧みそうりて云上人おすんなむし
天眼（てんげん）をもつさぞや南岳（なんがく）の衡山（かうざん）のちんみやくあい
東房（とうばう）第一乃念禅（ねんぜん）比丘（びく）なりわまつる南岳（なんがく）の道（だう）
人とはりに付ていかはしてその流と法華（ほつけ）
一乗の妙義（めうぎ）を説（とき）給ひしものかたりし者なりと
太子これをきこしめして左右（さう）にのたまひての
むかしの我ものうへかしら也秋九月小野妹子（をのゝいもこ）
大隋よりかへりてかへりにたまゐしてましさて
衡山（かうざん）のちんみやくはみなかへりてさうゆにありし
三の僧（そう）二口は遷化（せんげ）し一口はうせて御所（ごしよ）に

くりて云物のとしハ沙弥なりけりて他僧のも
てる所の経にとりてよみさづけかりんなものに
去年の秋子が国のなまりとハ是念禅法師なり
吾弟子の車に駕りして八百人とさく人東方
より空をふんてきたりて意房のうちを探て
一巻の経をとりおはりぬと志のざてさり給へり
かくて此法華八巻の義疏とゝめて上宮流
となづくる（是すなハち殿下入定のところなり）なまこせとしてりう給
十八年庚午春三月高麗の僧曇徴法定
二口わたりきたりなまいるかのこゝをりおんしまて

こゝにまた〳〵経にみ前身の微言とかつうちし経を
二人僧きたいりしてたまはりてまうさく我
か道とおほかたとしうしもそれもいまだ天眼と
あらずいま殿下の言をきくにむかし殿下弟子
として衡山にありし者ハ寿命てのち
みなかくれしらとそくここにありけり々も
吾等小僧ハしそのこともハ今ハすうなら法隆
ちかくみてし秋九月なまうるこゝに小
めしてとゝろの国ハ文みまり経ハみかやからみ
給ふてなうつなまするしおそらくさまうせ

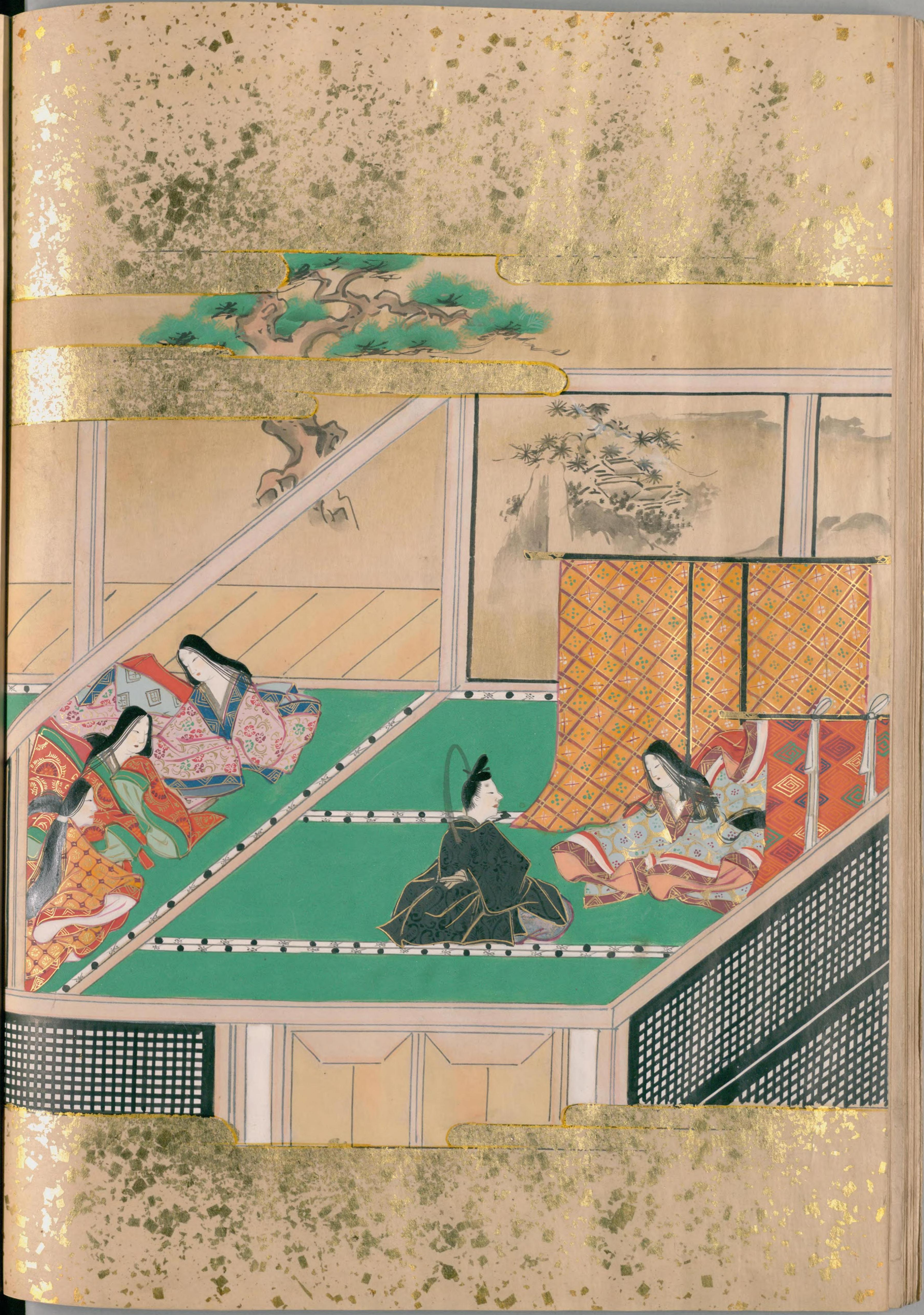
いかの宮にいり給ふ。かなたこまし草ともむしよわき
くすみ水との汝妻のこゝとおもひしれは妻れ
同しくおもひせ給ひしやはりと日比とおなしにきよう妻
これとをちしかんして後とつかりして草と
くみ水とのりとのたまへはすゝしく同とおもひて
水草とふたつをゐりこれとりつかへしてはすゑ冬十
月膳氏（しでのうぢ）妃（きさき）ふらひかたにかの妻妃ゐゝまゐりて
のたまはく汝わかことおほせのごとく其にしたかふ
おもろい吾すてにをはりとおもはさいはひ
なり吾死（し）すれは日同穴（とけつ）にともはうむれたまへ

妃まうしてまうさく殿下（きこ）の恵（めくみ）かうふりし庸妾（やうこ）寝（しん）
ふかくかうふりてつねにおもふは千秋（ちあき）万歳（よろづよせ）でんじやく
のごとく大嶽（く）のごとくあふきてわさはつかうまつらは
妾（やうこ）がさいはひ是（こう）なんいのちのかぎりおかりはらん
やまひのことのりてのちのたまふことなりぞ
くしゆんあれはおほくおかしこにこのみ志
ねんごろにうけたまはるこれ生れて進死（し）すのこゝにえてそれ
道すり吾もしかし教十身とのぞみて（かはれ）わかちとおさ
めおとおもひしことなりかはりの小国の儲君（ちよくん）の身と
なりくれはたましひとなりていはさ方の示

ともかくもすこしのあいだは秋典やうにくつてころり正
しうすこぶ御九夷の中とてもしかれど一天との
殷王の御へ御音久つしくみちつくみおそりんとに
欲せば妃すみてこそおぼしてこそへ云妾御さ
み何にかふりんたまりんしやりしてのこ御つく
御こころとどむることなきれ妃ひとくすりそび
ん忽いこあして御蘇りりとさころおまりは
おほせさ御ふといへさもよくしりてこれとつ給
もろこ群臣とめさんとおほ御り給せい妃しうめ
てさうし世をたもちおほりしめ寸御ありりしめ荒れと

しりてさびしくれしわたくしてましせんあらはれ
いまはそのこしめゆゆしきかんとおほそには
ゆりぜんさうれとおほりめてみこうし
めでたくとおほしめはくましめ坐とんと
とかくちには度せしめたまひめぐ御こと
殿下のおもかげそのこころの中へおもむく
いつきめくさ給ふ
因元のおんと
みりくんへり

十九年辛未春正月廿五日太子せうまん経
の疏(しよ)をつくりおはり給て慧慈(ゑし)法師に見大徳
とくと見てさんたんあさからすして一字(じ)
ともくはへす一文とも減(かど)さすしてかんじぬいそう
かうさう條(わきまり)のむすし(と)夏文月廿日天皇らう(ご)
将小幸てこうのし唐人(りうど)にさりのとかふれ
めんそうしれおさ子いさみてのさぬりくせられしや
のつとに佛教(かりのり)にかなふへきとりし儒童(じゆどう)菩薩
やうくそれ孔子とそきこえつるのゆへにけりすれ
とももとめうさうてゆきいれどもわかまりといぞ

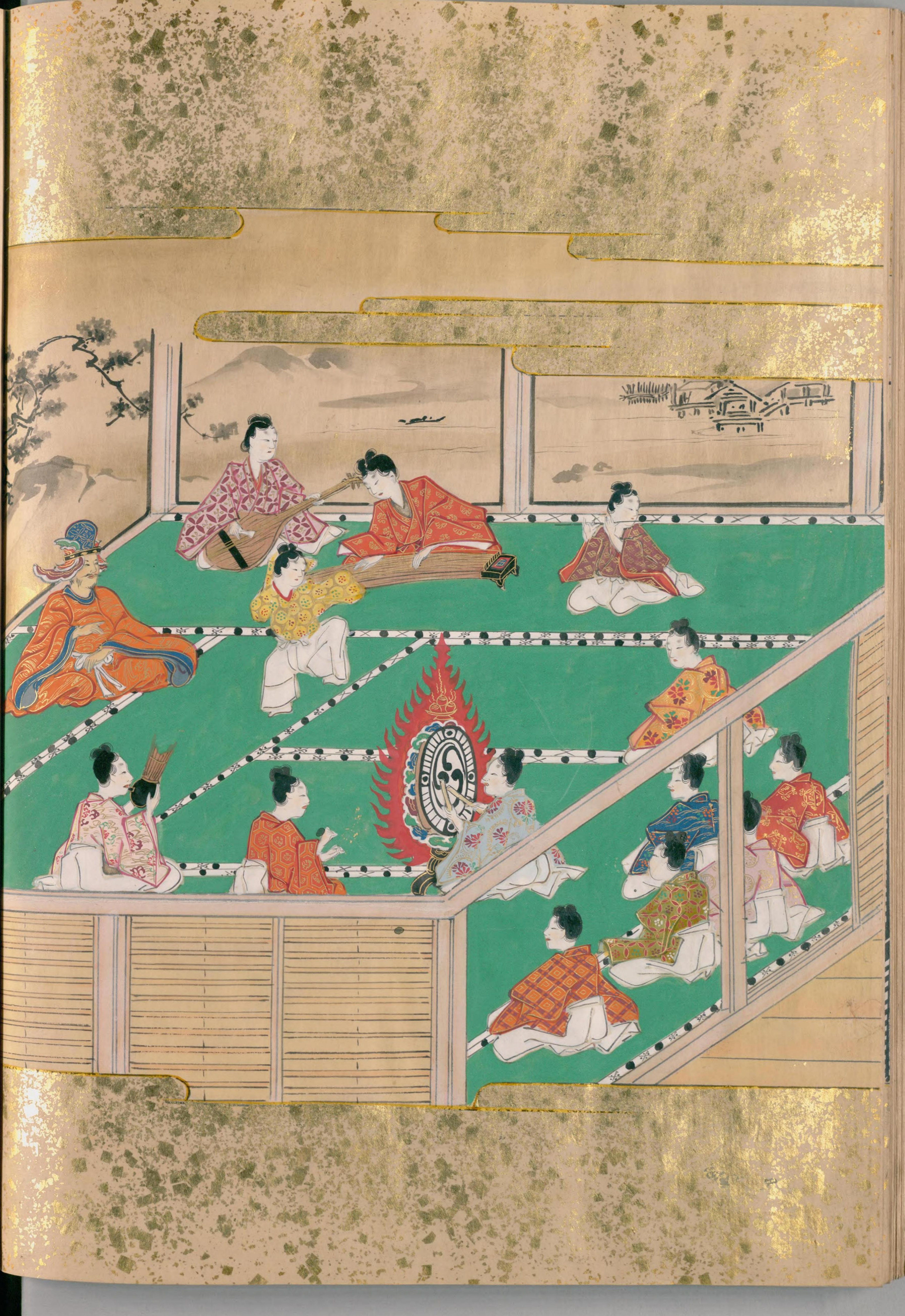


釈(しやく)氏の戒は一に不殺生(ふせつしやう)げてんの仁(じん)なりかるを
これおひゝふへりとして殺生のりくは陛下(きさき)か
くこれわざとつら給へしと天皇みつとみけり
しての御つく朕女(ゑ)をとして花せうあや
とらのむ是朕がおやもしらすりとゆくもく
ぎんぶうそいもりゆくされたるのこめり
これとたらん

二十年壬申春正月十八日なるはしめて維(ゆい)
摩(ま)經の疏(しよ)とれへり給ふ夏八月百濟(くだら)よりゆまう
きゝへ白癩病(しらはけやまひ)わりよく山嶽のことかまふ

群治(ぐんじ)これとめてんですそんとをこれゆき
ようすともわりたるそうしてとゝめつへ
しむ又百濟の味摩之(みまし)とのつうしきうこき
てきつゝしやさく呉国(くれのくに)みゆまなひて妓(ぎ)楽
ゆふとくゑふりとすすむ桜井(さくらゐ)の村に
をん屋まうし納(をさめ)しめ
かま(まんべ)とつへく
すゝひ
つとへしむ

（今の諸寺の妓楽舞是なり）太子そうし給く諸氏にみこと
のりして子弟（してい）壮子とをえらひてならはしめて
呉鼓（くれのつゞみ）とすうちしむ又令（のりと）は天下に下して
鼓とすうち舞（まひ）とすうりしむ（是今の財人のえゝ）太子従官（ともから）
みな音みそうりてのこまわく三宝とくやう
すつみは諸蕃（とをりのえに）の楽（ころもひ）ともしらめわりひはあへて
よまさじすしわとわりひいすしひてすよしに
あつくに毎なしく業（ごう）としてすひつゝくで
まつしくみ世つうゝにゆかさうへ
すへらく大臣としてれそうしてられとも



ろくしを

国立国会図書館